

知恵の樹

No. 128 2008. 3. 26

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局: 町田市森野 3-1-12 増山方

〒194-0022 FAX042-722-1243

「図書館の基本」を見失わない知性

中野の図書館を考える会 鈴木由美子

お茶を飲みながらガラス越しに、図書館員が働く姿をじっと観察できるスポットがある。JR中野駅南口にある総合文化施設「中野ZERO」1階喫茶室の奥の座席は、中野区立中央図書館の一般開架室を見下ろすことができるのだ。

2007年9月、私は田井郁久雄さんと一緒にその座席に座って図書館員の動きを眺めていた。長年岡山市の司書として働き今は大学で教えている田井さんは、ときどき首都圏の図書館を見学しに現れる。うまくそこに合流できたら、図書館現場を見る目がワンランク向上するという幸運を手にすることができる。

開架室のスタッフを見ながら「ちっとも利用者と話していませんね」「そのことならここに載っていますよ、と本を開いてみせる場面がないですね」と感想を述べ合う。大勢の利用者は無言で本を借りて出て行く。ワゴンを押しながら本棚の間を動いている女性スタッフが、利用者と会話する場面を見ることはなかった。

複合施設内にあるこの中央図書館には、特別な思い入れがある。昭和から平成に変わったころ、区当局が区議会の利権屋議員の意向を受けてウルトラ欠陥設計案を決定しそうになり、図書館を愛する中野区民や心ある図書館人の運動で、設計を根本から改善させた経緯があるからだ。

20年前に夢見た通り、広い開架室内に老若男女の利用者が賑わう大図書館になった。喫茶室

からは見えないが、参考室も調べ物をする人で込み合っている。

でも何かが違う。公共図書館の利用者は、繰り返し本を借りては返却するサイクルの中で暮らしているのだが、そこに図書館員の働きが入ってこないのである。本を借りに来た人が、知りたいことが書いてある本を見つけたか、調べ物を進める資料とめぐりあえたかに興味を持ち、支援してくれる働き方には出合えない。図書館員は参考室の机に座って、聞きに来るのを待つばかりである。

誤解がないように願うが、この図書館現場には正規の区職員はまずいない。雇い止め、つまり首切りをされた非常勤職員がNPOを作って現場業務を受託しており、民間委託という方法に問題はあるものの、東京23区ではとびきり良質の職員集団なのである。それでも、この沈黙の図書館現場になっている。

背後に、都会の司書たちが示してきた模範の問題点や図書館学研究者の理論的誤りを感じざるを得ない。とりわけ近年の図書館学者の迷走ぶりはずさまじい。

貸出を中心にするのが図書館を駄目にするという。求められた本を何でも提供する機能を軽視する。作家たちが自らの間違いに気付いて撤退したベストセラー複本批判をしつこく続ける。都道府県立図書館が市区町村立図書館をバックアップする機能をつぶしかかる。全域サービスを否定

する。利用者を見かけないビジネス支援コーナーを作るのが先進的だという。

今世紀に入ってから、図書館学者の論文を読んでは、図書館を破壊するだけのアホな論文が何で書けるのかと嘆息することが多くなった。中でも代表的な学者たちを、私は子ども時代のテレビ番組にちなみ「有名大学三馬鹿大将」と名付けている。

ところが、彼らに批判を抱いていても、それを公表する人が少ない。「権力に媚びることしか考えていない人には何を言っても無駄だ」とか「人間関係能力が欠如した人物だから相手にしない」とか「人間性は壊れてないが図書館現場には超無知なまま生涯を終える人だ」などと理屈をつけて、大勢の図書館関係者が物言わぬことを選んでる。図書館現場を知る司書であり研究者として、彼らに対しきっちり反論を書きつづけてきたのが田井郁久雄さんである。

この3月14日、「町田の図書館活動をすすめる会」にお邪魔して田井さんの講義を聞いた。貸出しも読書案内もレファレンスも、切断分離できないひとつのものであるというお話に、具体例を思い浮かべながら頷くことができた。民間委託や指定管理者制度導入、貸出やリクエストの機械化と、図書館情勢は急速に変化している。そういう時期だからこそ、市民が図書館の基本を見失わないこと、図書館を破壊するヘンテコ理論に乗せられない知性を持つことが大事だと思う。

生活圏の中に図書館があって、司書の助けを受けながら知りたいこと読みたいものを手にできる境遇、これがすべての人に実現するように。そのために私は、できることをしていこう、考えていることを書いていこうと本気で思った。雨の日に出かけて得た「町田効果」を、形あるものにしていくのはこれからである。 (中野区在住)



田井郁久雄 (たい かくお) 氏講演会



やっぱり民営化ではいけない!

— 田井郁久雄氏講演会を聞いて —

3月14日(金) 午後3時半～5時半
町田市立中央図書館・中集会室

ご自身の個人誌「風」(月刊)や、季刊図書館批評誌「談論風発」、その前身の「三角点」などで、時流に流されない図書館論を発表し続けている田井郁久雄さんが、このたび首都圏の図書館を見て歩くために上京されるということを知り無理にお時間を割いていただき、「図書館の基本を求めて」と題した講演会を開催。田井さんは、もと岡山市立図書館の職員として長い間第一線で仕事をしてこられた方で、現在は大学で教鞭をとる傍ら、実務家としての経験と図書館に対する深い見識から導き出された図書館論を発信しておられます。その一部はこの1月に『図書館の基本を求めて』(大学教育出版)として、一冊にまとめられました。当日は急な催しにもかかわらず遠方からの方を含め約40名程が参加されました。

この日の講演は、「図書館に何が求められているか～図書館の現状と図書館の役割～」について、くつかの図書館の典型的な様子を収めた写真を見せながら、マスコミなどでもはやされている図書館の、それが果たして本当に市民が求める図書館像なのか、わかりやすく説明し、かつ問題提起をされた。

最近の新しい図書館の状況

話題の新しい図書館の事例としてあげたのは、今やマスコミの寵児? 千代田区立図書館をはじめ、

埼玉中央図書館、府中中央図書館などで、大規模、アクセスの良さ、長時間の開館とともにハイテク化が売りとなっている。しかしいたずらに夜遅くまで開館しても、実際夜間の利用者はチラホラで、午後10時まで開館する必要が本当にあるのか、との疑問を呈していた。

ICタグによる自動貸出・返却システムもしばしばマスコミで紹介されているが、これはある種メーカーの実験台のような側面があり、相当な経費がメンテナンスにも費やされているものと予想される。ま

たICタグ自体がまだまだ高価で、それが資料費を圧迫しているとしたら本末転倒もはなはだしい。こういった開発途上のものはすぐ古くなってしまいうデメリットがあるが、一端入れてしまうと使い続けなければならないという負の面を持つ。またいくつもの図書館がこぞって打ち出しているビジネス支援についても、カウンターを別に用意した方がいいが、実態はほとんど利用客のいないところが多く、それについての統計も十分検討できるほどには出てきていないという。高価な有料データベースを用意したが、1日1件の利用では、なんのためなのか。

民営化の裏面

まるで合言葉のように民営化が叫ばれ、民営化された図書館がすばらしい成果を挙げているかのようには喧伝されているが、田井氏は、活気のない図書館ほど民営化を指向している実情、民営化せずとも直営でも図書館員の意識改革をすることで同じだけの、いやそれ以上の成果は挙げられるのだと強調する。自身が図書館員として挙げてきた多くの実績が、それを実証しており、説得力がある。むしろ質をきちんと検証することなく、民営化それ自体を目的化していることに疑問を呈していた。機械化・ハイテク化と民営化とが一体となって進行し、一方では民営化による人件費の削減、他方では機械化による膨大な経費の上昇があるが、それはあまり見えてこない。

高度な？レファレンスサービス

披露してくれた写真で、貸出カウンターとレファレンスカウンターをわざわざ別にし、貸出は派遣に、レファレンスは専門職にと業務内容を分けた図書館の様子を見ることができた。あたかもレファレンスが高度で貸出は誰でもできるといった観念がまかり通っているが(そしてそういったことを言う、お偉い図書館学者もいるが)、これは市民の感覚とはかけ離れているという指摘は、やはり現場を知っている人のものだ。市民にとってはレファレンスカウンターにわざわざ聞きに行くというのは相当に勇気があるもので、カウンターに聞きに行くことすらためらう人が多いのが実情。むしろ配架で書架を歩き回っている職員をつかまえて訊ねる人のほうが、はるかに多いという。

また別の写真で、お客のいないレファレンスカウンターで、職員が一人さびしくモニターを注視している図や、新刊棚とは名ばかり、ガラガラになった

まま放置されている「新刊棚」などが印象的だった。これはおそらく自動返却装置が使われるため、戻った本の中から話題の本をまた新刊棚へ並べるとい、きめ細かな配慮が軽視されているからだろう。配架はけして機械的にできる作業ではなく、常に書架や利用者の様子を観察し、資料の動きに注意を払う姿勢が大切だと強調する。それが結果として利用者への適切な資料案内・提供へと繋がる。

カウンター業務の重要性

氏は図書館サービスの基本中の基本である「貸出を重視する」ことの意味を、司書の専門性と絡めて説明された。一見バーコードをピピッと読むだけの単純作業のようだが、実際はそこで利用者とのさまざまなやり取りが生まれ、利用者の要望や質問に答え、書架へと案内し本を探し、なければ予約をすすめる・・・といった一連の動きの中に、利用者のニーズを知ることや資料への精通、選書への反映などが関連してくる。いうなれば図書館をより充実したものに育て上げていくための仕事のエッセンスが、カウンター業務の中に凝縮しているのだ。これをたとえば単純作業としてカウンター業務のみを切り離して委託することは、最終的にはすべてのサービスを民営化することへと繋がるだろうと警告する。

このようにカウンター業務の軽視は、図書館サービスの基本の軽視となり、結局は利用者のニーズを上滑りするものとなるだろう。カウンター業務の大切さを再認識し、チームとしてそれに応えられるような組織作りが必要で、これは部分的な民営化をしてしまっては到底できないことだ。

直営としての図書館の意義

カウンターサービスやフロアワークは総合的な業務であって、職員がチームワークを組んで当てること、日常のサービスを充実させ利用者との係りを大切にすること、こういった基本的な改革で、言われているような民営化に負けず劣らずの成果を挙げることができる。意識的なチームワークへの取り組みは直営だからこそできることであり、責任体制の確立は利用者からの信頼に結びつき、結果として利用の増加、サービスの発展へと繋がる。もちろん職員の育成も重要な課題で、これとて直営だからこそ長いスパンで考えていけるのであって、民営化されればころころと変わってしまうだろう、それ

では心許無い。

お話の中には出なかったが、最新の「風」の中では自動化書庫の問題点も鋭く指摘されていて興味深い。世の中が効率のみを追求していく風潮の中で、切り捨てられていくものはなんなのか、冷静に見極める必要があるようだ。

民営化の問題点を指摘することも大事だが、同

時に人と人とのつながりや温かさを大切にしたいサービスの基本を繰り返し追及していくことが、結局は民営化を阻む最大の武器であることを痛感した。そして市民が、市民のための図書館をなにより愛すること、時には苦言を呈しながらも共に手を携えて育んでいくこと、共に成長していくこと、これしかないのだと確信した。(会員:水越 規容子)

「荒川区の非常勤職員制度改革—処遇改善をめぐる—」

— 町田市職員労働組合・町田市図書館嘱託員労働組合 共催学習会を終えて —

去る2月25日(月)中央図書館ホールにて、荒川区図書館非常勤職員労働組合執行委員長岩淵健二氏、同副委員長澤田亜矢子氏のお二人を講師としてお迎えし、2時間という限られた時間中、「主任非常勤」「総括非常勤」制度についてはもちろん、今私たちが求めている育児休暇や有給での病気休暇をどのように勝ち取ったか等、組合活動やその成果などについてお話いただいた。また、当日参加者(68名/図書館45・他部署23)の質疑応答にも丁寧にお答えいただき、有意義な時間を過ごすことができた。

学習会を終えて、何より、参加者の意識が今後の展望に前向きに取り組む姿勢になったのを強く感じている。要求改善をしていくうえで、法や非常勤を取り巻く現状など、学ぶべき事は沢山あるが、まずは一人ひとりの意識が一番大切である。今後、更なる厳しい状況が予想される中、働き続けて行くためには、個人の意欲と周囲の助け合いが必要不可欠であろう。

今回の学習会は、組合活動の意義を再確認し、前進する大きな道標になったと思われる。

また、市職労と共催して頂いたお陰で、館長をはじめ職員の方々の参加があり、共に今後を考えてもらえるよい機会であった。館長に当局側の厳しい意見を発言してもらえた為、組合役員以外の参加者も難しい現状を、よりよく理解出来たように思う。町田市で働く他部署職員・嘱託員の方々の多数参加があったのも大きな成果であった。今後、組合活動を進めていくうえで、部署に関わらず、

荒川区では、07年4月に「主任非常勤」「総括非常勤」の制度が導入され、嘱託職員の処遇について一定の改善が図られました。町田市でも図書館をはじめとして多くの職場に嘱託職員が導入され、それぞれの職場で重要な役割を担っている現状の中で処遇改善をどうしていくかということは重要な課題だといえます。そこで荒川区の非常勤制度についての詳細と、約1年を経過する中で見えてきた点等についてお話を伺うことになりました。

(呼びかけ文より)

町田市全体での連携が必須である。今回の交流をきっかけに、嘱託員・非常勤の繋がりを広めていきたい。

講師のお二人には、遠方よりお越し頂き本当に感謝している。大変分かりやすい充実した内容の講話で、お二人が主任制度後、全国を回り、お話を繰り返しているのがうかがえた。岩淵氏の「勝ち取った制度は広めていかないと本当の意味での底上げにはならない」の言葉にとっても感銘を受けた。組合活動を始め、学ぶ程に法の理不尽さに突き当たる。確かに、自分達の要求改善も重要であるが、もっと大本の全体を見据える眼を持つことで、更に大勢の改善につながるのではないかな。そんな希望と力をもらった会であった。

今、図書館界全体に委託・指定管理化の波が押し寄せている。私たち嘱託員一人ひとりの力は小さいかもしれない。だが、図書館を通じ市民によりよいサービスの提供を、との同じ思いを声に合わせて、働きつづけるために、これからも一歩ずつ進んでいきたい。

(図書館嘱託員労働組合 執行委員・関口)

どの本読もうかな?! ～2007年子どもの本を振り返って～

広瀬 恒子氏 講演会

2008年3月18日(火) 10時半～12時半 於:中央図書館6階ホール

毎年3000点を超えて出版されている子どもの本の中から、広瀬さんが、お勧めのあるいはそうでない本の問題点なども含めて紹介して下さるこの講演会は、子どもの本に関わっておられる多くのリポーターが待ち望むものとして定着し、講演会のリストを参考に学校図書館の蔵書選びをしている方も多いと聞きます。

この会は、町田読書会文庫連絡会がスタートさせ玉川学園文化センターを会場に行われていましたが、参加人数も25人くらいからだんだん増え始めたこともあり、2002年の新刊子どもの本の紹介(2003年4月=88人参加)を機に会場を中央図書館のホールに移して当会が



主催を引継いだという経緯があります。その報告が、当会報発刊年度(1996年4月発刊、1/月発行)の3月(11号)から掲載されていますから、少なくとも11年以上続いているということになります。

その間広瀬さんは変わらず、社会状況と子どもの周辺を絡ませながら、温かいまなざしと鋭い感覚で面白い本をたくさん紹介してくださっています。今年は春休み前の開催のため、仕事で参加できないひとから残念がる声が聞こえてきましたが、他地区の方たちも含めて50名(内会員8名)の参加がありました。紹介本40数冊の殆どが、町田市立図書館蔵書の中から職員が揃えてくださったのも市民として嬉しいことでした。

はじめに、2007年度生誕100年を迎えられたリンドグレーン(96歳没)と今なおお元気でご活躍の石井桃子さんについて、作品・新聞インタビューの中から、子ども時代に遊び死にしそうなほど遊びほうけたリンドグレーンや、おとなになってからも大人と子どもの間をふらふらと歩いているとおっしゃる石井桃子さんを紹介し、感受性の豊かさについて話された。

◇子どもの本の出版動向は、古典名作からケータイ小説まで多種多様で、その両極端の間にある文庫本・軽装版スタイルの廉価で読みやすい本が増えた。内容は、魔女とか妖精のファンタジーものが多い。

日本の本の売り上げは、1996年をピークに下がってきており、そんな中でも子どもの本は比較的安定していたが、出版界の不況がつのり、『清貧の思想』声に出して読みたい日本語』などベストセラーを多く出してきた草思社や、自費出版大手の新風舎が経営破たんし、児童書を多く出していた新風舎の点数が減った分

昨年4000点を超えて児童書総点数も、ここに来て下がり始め、転機に立った2007年であった。

・出版界の不況感つのる草思社・新風舎の経営破たん——「負のスパイラル」

2007年間児童書新刊総点数=3,599点

絵本=1,466点(全体の41%)

文学=1,016点(// 28%)

NF=467点(前回422点)

絵本・・・日本子どもの本研で、その月に出了た100冊近いものを一冊一冊選定する作業をしているが、〇がつくのは3点か4点ぐらい。

☆赤ちゃん絵本

ジャンルにいろいろな作家がトライしているが、赤ちゃんは他者とのコミュニケーションの発想が難しく、未だ松谷みよ子の『いないいないばあ』を超えるものがあるかどうか?

そんな中で、三浦太郎の活躍が目立つ(『くっついた』『な～らんだ』『わたしの』)。

☆ストーリー性と主人公の存在感

起承転結の面白さでアピールするのが割と少なく日常生活を捉えて抒情的なのが多い。昔話の形式をとった『ひよこのコンコンがとまらない』(ガルドン再話)は、食べてはダメと言われた大きい種を食べ声が出なくなり水を求めてあちこち歩くその道程が面白い。「ぐりとぐら」や「どろんこハリー」のように主人公の顔がぱっ





と浮かぶ『ベスとアンガス』がリニューアルして再版されたが、幼年ものとしては安定感がある。『ねぼすけはとどけい』（ルイス・スロボドキン 作/ 偕成社）1つだけ鳴るのが遅い鳩時計、その訳は？



たとき、紐解くことで大人も癒される。
☆あそぶ・見つける楽しみ

『シモンのおとしもの』（バーバラ・マクリントック 作・絵/あすなる書房）／落とし物を探しながら、丁寧に描かれたフランスの名所を楽しめる、『ミッケ』バージョン。

『おたすけびと』（なかがわちひろ 文・コヨセジュン



ジオ絵/徳間書店）／一家が出かけたその留守に、「小人たちがやってて、…」キーキを作る過程が面白い。
☆アジアの国の文化に親しむ

『おつきさまにぼうしを』

(シュールト・コイパー 著/文溪堂) オランダの話。なかなかお月さまに届かない…。

『わすれんぼのねこモグ』（ジュディス・カー 作・絵/あすなる書房）。シリーズものが大判になって。作者が飼っている猫をモデルに、もの忘れの激しい愛すべき猫が、その性格が功を奏して手ごたえをたてる。



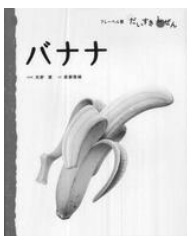
『ローザ』（ニッキ・ジョバンニ 文 ブラ



イアン・コリアー 絵/光村教育図書）／主人公は洋裁をしている女性。バスの座席を巡っての黒人差別に、乗車拒否の抗議運動を起こし差別撤廃をさせた実話に基づいた話。

☆写真絵本の健闘続く…ミクロからマクロまで切り口がいろいろあり、小学校低学年が読めるようなものまで出てきている。

『バナナ』（天野實 指導・斎藤雅緒絵・フレーベル館）／幼児も楽しめる。種がないバナナ、なぜ実がなるの？



『干し柿』（西村豊 写真・文/あかね書房）／渋柿の皮をむくところから干し柿のできるまでを丁寧に追う。ひとつだけ実を木生りで残す意味は？

『カカトアルキのなぞ』（町田龍一郎 監修/東城幸治 写真・文/新日本出版社）88年ぶりの新昆虫、カマキリとバッタの中間のようなカカトアルキ、その生態とは…。



『冬の日ー里山の日シリーズ』（今森光彦 著/アリス館）／琵琶湖近くの里山の写真にエッセーを添えて。疲れ

『アローハンと羊ーモンゴルの雲の物語』（興安ヒガン



作・蓮見治雄文 解説/こぐま社）／日本画と水墨画をミックスした色調で、雲を羊のイメージと重ねて草原の生活を格調高く描いている。

『ソルビムーお正月の晴れ着』（ペ・ヒョンジュン 絵と文/セーラー出版）／韓国の晴れ着を着る順序が描かれている。男の子と女の子をあわせて読むとその国の文化を、服装の彩りから楽しむことができる。



『10にんのきこり』（A. ラマチャンドランさく/講談社）ゼロを極めた数字に強いインド、自然を切り開いていくことへの抗議が描かれている。

☆オープンエンディング

『ぼくがラーメンたべるとき』（長谷川義史 作・絵/教育画劇）／読んだ人がそれから先を考えるオープンエンディング。固定的なものが何もない中で、子どもの存在が描かれていく。どこの国の子どもも倒れているのではなく、立っていて欲しいというメッセージが伝わってくる。



よみもの

☆低・中学年は不振 → 絵本へ傾斜

『100枚のドレス』（復刊）（エレナ・エステイス 作・石井桃子 訳・ルイス・スロボドキン 絵/岩波書店）



50年前のものだが、現代にも通じる KY(空気を読む)斬新さが読ませる。『ワビシーネ農場のふしぎなガチョウ』(D.キング=スミス 作/三原 泉



訳/いとうひろし 絵/あすなる書房) / 飼っていたあひる「がっくりとしょんぼり」がある日金の卵を産み、侘しかった農場に運が向いてくる。動物物語が多いキング・スミスのたのしい作品。

☆力作は、高学年～YAに

・今を生きる子どもをみつめて・・・14, 5 歳からの作品が多い。

KY 時代を反映する正直に自分を出せない、その人と人とのかわり、つながりを描く作品が目立った。



『そのぬくもりはきえない』(岩瀬成子 作/偕成社) / 相手に気持ちを伝えるのが苦手な小学4年生の女の子が主人公。頼まれた犬の散歩から心の中に描かれた男の子を通して成長していく。読後何ともいえない温かさが残る。



『リボン』(草野たき 作/ポプラ社) 卒業時、下級生から制服のリボンを下さいといわれるのは誇り。義理でリボンを求め断られた主人公が、その人気のない上級生の姿勢から、自立した個人として目ざめ成長していく。

『緑の模様画』

(高樓方子作/福音館書店) 3 人の少女が「小公女」を通し結びつき、クローバーの生えている花園をシャムロックとして楽しんでいるミステリアスな物語。正面から温かさとか幸せ感、いい気持ちにさせてくれる物語。



『川の光』(松浦寿輝作/中央公論新社) / おとなの文学? ねずみ一家が困難を乗り越え安住の地にたどり着くまでの冒険を迫真的に、息をもつかせぬ筆力で描く。さすが芥川賞作家。しかし大変な思いをして行く意思を支えるバックボーンが見えにくかった感



がある。町田では 80 名以上のクエスト待ちとか。

・記憶の再生

『ジャック・デロシュの日記—隠されたホロコースト』

(ジャン・モラ 作・横川晶子 訳/岩崎書店) 17 歳少女の拒食症の原因は、祖母の日記に書かれていた、名士として知られる祖父の戦争加害者としての過去—ナチス党员—にあった。親世代と切り離して戦争を考えがちな日本の若者と違って、孫の世代が引きずっていく苦悩が描かれ問



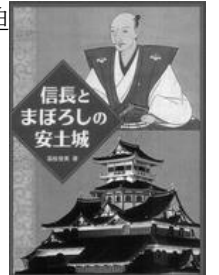
題を投げかけてくれた。



『ヒトラーのはじめたゲーム』(アンドレア・ウォーレン 作・林田康一 訳/あすなる書房) 12 歳の少年ジャックは、収容所に入れられたとき、これはゲームだ、ゲームには勝たねばならないと、過酷な中で打ちひしがれそうな心を奮い立たせ生きる意志を持つことを執拗に迫

った。

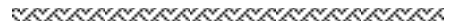
『信長とまぼろしの安土城』(国松俊英 作/文溪堂) / 少年使節がバチカンに見せた地図。その地図があれば安土城の全貌が見えるのに・・・。(国松さんは、当会会員)。



最後に、◇子どもの読書環境にかかわって

OECD(経済開発協力機構)による PISA(国際学習到達度調査)によると、日本の子どもは科学への関心と読解力が低いという結果が出たが、読書は心の中に宿っていくもので短絡的に評価できるものではない。

昨年小学生が図書館で借りた本は約1億3491万冊で(1人 18.7冊)で過去最高であった。また、図書館が全国的に民間委託化の流れの中で、「子どもの読書活動」は本当に推進していきけるのだろうか、矛盾を感じている。



また今年も読んでみたい本がたくさん見つかりました。読みたいと思う本が図書館で借りられるだけでなく、仲間と読んだ本について話し合えるほど複本があればと思いますが、年々図書館の資料費は減額されその願いが適わなくなってきました。私たちが「読みたい」「読みたい」と声を上げることも図書館発展のために大事なことではないかと思ひます。ここに紹介できなかった本が 20 冊近くあります。資料ご希望の方は事務局まで住所・氏名をお書きになって FAX にて、< 200 円(送料込み) >(増山)



ひろば

< 2月例会報告 >

27日(水) 16:00~作業

18:00~20:45例会

於・中央図書館中集會室

出席/伊藤 島尻 手嶋 前島 増山
丸岡 水越 桃沢 守谷 山口洋

○守谷さんからの情報で3月14日(金)に急遽臨時例会を開催することになった田井郁久雄氏の講演会について、事後承諾を得る/お知らせは各団体MLを活用し人集めをする/会場は、ホールが映画上映で使えないため中集會室を予約/講演会後の懇親会は「くいものや熊」で/職労との共催は無し等々。

○「2007年度児童新刊本紹介講座」について/作品リスト(カラー刷り)は水越さん作成/9:30~設営準備、70人分資料セット/資料のみの頒布200円で/その他担当者を決める(報告⇒P5)。

○町田市民にとっての望ましい図書館の資料づくりについて/市に要望書として出しても期待薄。活用方法を具体的に考えた上で作成する。

○市民が望んでいることなどを意見としてアットランダムに出してみてもは?/児童コーナーまで占拠している大人の利用者がいるが、図書館に対して何か意見を持っているのではないか。

・多言語サービスについて、児童書から取り組んでみる/多数の言語で出ている絵本をそろえる。子どもに母国語以外の存在を知らせる機会にもなる/日本の社会は外国人に対して冷たい。町田には朝鮮人学校があるが、本を余り目にしない/職員が忙しく多言語対応がとれない。ボランティアを視野に入れたサービスも考えられるのでは/外国人利用者ってどのくらいいるのだろうか、利用したくてもできない人がいるのでは?

・市長の市政方針演説で4つの柱が言われたが図書館や文学館は全然出てこなかった。商業、観光面で都市競争に勝つのが中心議題、町田の今のあり方もいつ変わってしまうのか予断を許せない/図書館をほんとに大事に思っている図書館員は全体の何%? 肝心な図書館員や学校の先生に本好きな人が少ないのも問題/府中が委託になってしまった/市民にとって委託の問題は見えないし、感じられない/囑託等について、外国は給与ベースは同じで時間提供の差で違いができるだけ。日本では仕事そのものの評価が違う。荒川区は正職が極力すくなくて後は全部囑託。そういうやり方で指定管理者制度を避けている。指定管理者制度は更新

毎に方針が変わる危険があり本来のサービスが守られない恐れがある。~取り留めない話~。

○浪江先生が書かれた「書簡集」を会で出版してはどうかー

○図書館に関連する催しは、市民団体が主催であっても図書館のホームページに載せて欲しい。情報の拠点としての図書館機能を考えると、役所関係でないで載せられないというのは、あまりに杓子定規。多くの人が目に触れることで、図書館利用者を増やし図書館の発展につながっていくのだが・・・。

○京王線沿線 7市(八王子・府中・調布・町田・日野・多摩・稲城)図書館連携事業の調印式が行われた。サービス内容は自治体によって違う。府中・調布・町田は連携事業サービスではリクエストを受け付けない。橋本はこれから委託になる。相模原、府中、稲城もPFIを導入、そんな中での連携である。

○住民運動をし、ただひたすら図書館ができるのを楽しみにやむにやまれぬ気持ちで文庫を29年続けてきた。市議会で採決された図書館10館構想はどうなっているの?(⇒立ち消え!)/運動をし続ける必要がある/鶴川→忠生市民センター(町内で決定)→小山が丘の順に図書館建設計画があるが、さるびあ図書館の老朽化も検討課題で廃館案も出ている。

○N中の場合、図書室を4階から1階にして、将来地域の図書館として開放する案も?

お知らせ

●「文学館おとなのためのおはなし会」/4/17(木)

10:30~11:30/問い:町田市文学館 042-739-3421

●「戦争なんか大きらい!」子どもの本九条の会設立の集い/4/20(日)13:30(開場)~16:30/東京都児童会館/活動報告・トークショー(那須正幹×田島征三)/問い:丘 042-687-5386

●「すてきな絵本の世界展」~コルデコット賞受賞作品を中心に~/約500冊の原書と翻訳本の絵本などを展示/麻生市民館ギャラリー(新百合ヶ丘北口歩2分)/4/11(金)~16(水)10:00~17:00(初日は2時~/主催:おはなし玉手箱 小林 ☎044-953-8748

あとがき 思いがけず田井さんのお話が聞け、その上17名もの人たちと懇親会を持つことができた。市民の他に田原の森下さん、多摩市の住田さん、日野の石嶋さん、そして席上原稿をお願いしたら2つ返事で引き受けてくださった中野の鈴木さん。田井さんを囲んで、料理に舌鼓を打ちながらそれぞれが図書館への熱い思いを語り合った。(M)